

令和 2 年 6 月 12 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K14799

研究課題名（和文）ベトナムの尺度及び建築設計技術に関する陸域・海域の両ネットワークによる伝播と受容

研究課題名（英文）The study on the transmission of the architectural technology and foot-ruler via overland and marine route

研究代表者

木谷 建太 (Kitani, Kenta)

早稲田大学・理工学術院・次席研究員（研究院講師）

研究者番号：50514220

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：ベトナムは、漢字文化圏に属しながら、中国・韓半島・日本とは異なる造営尺度を持ち、さらにその造営尺の運用方法である建築設計技術について、登り梁ケオを合掌に組む独自の木造架構を構成し、また陵墓には異なる寸法体系を用いる独自性を持つ。以上の3つの課題について、陸域・海域に跨がる複数のネットワークの重なりとして捉え、これを総合的に検討し、ベトナムが他の地域との交流を通じて、尺度概念を受容し、共有していったことの一部を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、東南アジア研究に関する新たなアプローチとしての「港市国家」論および海域アジア研究等の関連周辺研究の成果を援用する学際的なものであり、また造営尺度とその運用方法である建築設計技術という一連の対象に、陸域・海域に跨がる複数のネットワークの重なりを見出した点が、これまで提示されていない視座であり、ある程度の生産組織の長期間の交流を基礎とする技術の一つとして、造営尺度と建築設計技術についての解明がなされるとともに、技術レベルや技能といった、伝達の難易の差と、伝わるネットワークの陸域・海域の差に関連性に言及した点に意義があると考えられる。

研究成果の概要（英文）：There are three subject in the field of study on the architectural history in Vietnam. First is that the official ruler for construction in the past Vietnamese dynasty are different from the those of other countries belonging to the same cultural sphere, in which Chinese characters were used, China, Korea, Japan. Second is that the past Vietnamese dynasty have a unique design methodology of the wooden architecture that has slating beam named 'Keo'. Third is that the coastal areas of South China Sea have two dimensional systems that differ from one another; one is for the living and another is for the dead, for example, mausoleum. I consider that three subject as the overlapping plural networks via overland and marine route and reveal that the past Vietnamese dynasty gradually accepted and share with other surrounding countries through interaction.

研究分野：東洋建築史

キーワード：ベトナム 尺度 建築設計技術 海域ネットワーク 陸域ネットワーク

様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ベトナムを含むインドシナ半島の研究は、フランスによる植民統治時代に設立したインドシナ考古調査団(フランス極東学院、EFEO)によって始められた。その後、マレー半島やインドネシア・フィリピン諸島の島嶼部を合わせた、東南アジアという地理概念の一部として研究が進められた。

かつてフランスの東南アジア研究の泰斗、ジョルジュ・セデスによって提唱された「インド化」による古代国家形成論は、多くのケース・スタディを通じて克服されつつある。すなわち、すでに東南アジア域内に交易活動による政治的支配権力が交易の要衝に複数発生している基盤があり、インド文明はその支配者らによって選択的に、あるいは「地方化」されたかたちで受容され、支配の強化がはかられた、という見解によってである。その中で登場したのが、経済の集中点である港市と政治の中心が重なる「港市国家」論であり、近年では、「東アジア地中海」や「海域アジア」と呼称して、人・モノ・情報が交流した東・南シナ海を中心とするネットワークとして領域を捉える、学際的・横断的研究が進められているが、海域での交流と、陸域での交流と合わせて総合的に、各国・各地域史を見直すまでは至っていない。

申請者がこれまで研究の対象としてきた、ベトナム中部都市フエは、ベトナムを、現在の形で統治した最初で最後の王朝である阮朝(1802~1945)の都であり、基盤目状の構造を有する中国的な街区を、フランス的なヴォーバン式城郭が囲む構成に代表されるように、多様な文化が一定の秩序のもと融合している。

また、阮朝期と現在とは、いくつかの点において断絶がみられる。そのひとつに、建築に關係する用語、ベトナム語の表記法がある。中国による支配、ベトナム人による独立、フランスによる植民地支配という歴史を経験したベトナムでは、漢字、字喃(チュノム。形声による造字)、ラテン文字表記(1945年以降、正書法)の3種類が存在する。伝統的技術保持者(大工棟梁等)への聞き取りによって得られる用語名称は固有語(ラテン文字表記)であり、それに対して阮朝勅撰の文献に用いられる用語は漢語である。それは、前者が伝統家屋に関する用語であり、後者が宮殿建築であるという違いを超えて、言語として異なることを意味している。また、尺度においても、阮朝期における造営尺(木尺)は、1尺あたり、424mm近傍であったことがわかっているが、現在の大工の使用するものさしは、1尺あたり400mmのものさし、ないしメートル単位の巻尺である。建築生産組織としては、阮朝期には官の組織下にある「木匠」の集団であったが、現在では、木造建築を専門とする大工集団がそれぞれに活動しており、宮殿の造営に携わった技術者(集団)は途絶えてしまっている。これらの要因として、第一次インドシナ戦争と、続くベトナム戦争が挙げられ、特に、1968年のテト攻勢で、戦場となったフエは、建物の倒壊や焼失に留まらず、建築生産組織の中核をなす、工匠の集団に壊滅的な損害を与えたことは想像に難くない。

この課題(断絶)に対し、各地に点在する史料(ベトナム・フランス・日本)を用いた比較研究、ベトナムへの長期間の派遣を通じて現地に残る文献資料や遺構における墨書や刻書の収集、現地の研究者らとの共同研究を総合的に検討を行い、『漢喃文献にみるベトナム阮朝の建築生産組織に関する基礎的研究』(博士論文)としてまとめた。

2. 研究の目的

学術的背景と申請者の既往の成果を踏まえ、新たな課題として、ベトナムは漢字文化圏に属しながら、中国・韓半島・日本とは異なる造営尺度を持ち、さらにその造営尺の運用方法であるところの建築設計技術については、ケオと呼ばれる登り梁を合掌に組む独自の木造架構を構成し、また陵墓には異なる寸法体系を用いることへの追及・解明があり、これまでの研究から幾つか手懸かりが得られている。

まず、阮朝およびその始祖である広南阮氏によるチャンパの攻略と、その成果である現在のベトナム中南部域への勢力拡大が挙げられる。登り梁ケオの架構を残す建物の分布を見る限り、この「南進」の過程で、独自の架構形式を生み出したことは明らかであり、これはチャンパの建築設計技術との交流を示唆するものである。

つぎに、造営尺度について、近隣のカンボジア・クメール王国時代の度制単位は、インド文化圏で見いだされるハスタ(肘尺)に近い長さを有していたとする認識が研究史を通じてほぼ共有されており、溝口らによって単位長1ハスタ=412mmが推定されている。石井によって提唱された、ベンガル湾からスコータイを繋ぐ「東西回廊」と、アンコール・ジャヤバルマン7世による「王道」が接続していたとする説(4)を信用すれば、スコータイ、クメール、チャンパへと陸域ネットワークによって、インド文化の尺度概念が伝達していった可能性が想定できる。ベトナム阮朝の造営尺や、中国雲南省の少数民族・佤族の伝統的尺度も近傍の寸法値をもつことから、中国・ベトナム・ラオス・ミャンマーの国境地域を介した陸域ネットワークによって肘尺が伝播されたことも予想される。

また、阮朝では陵墓を、「魯班尺」と呼ぶ、造営尺とは異なるものさし(1尺=384mm、木尺の9/10)によって設計されたことが研究されているが、現代の台湾の風水師が陰宅風水を判断する際に用いる魯班尺(門公尺:約43cm/丁蘭尺:約39cm)の存在(6)や、沖縄で仏壇や門、墓、龕などを造る際に用いられた唐尺(唐定規)の存在という同様の事例がある。これは明清代以降、中国東南沿海地区に流布したとされる大工技術書である『工師斷正式魯班木經匠家鏡』(魯班經)にある「魯般真尺」の記述(8等分した目盛りに「魯班尺八首:財・病・義・

官・劫・害・吉・本」の句が書かれ、門をつくるときの吉凶を占う)とも共通点が見られ、南シナ海の海域ネットワークによって、死者のための建造物に別の造営尺度を用いる方法が伝播されたことが想定できる。

以上の3つの方向を端緒として、ベトナムが他の地域との交流を通じて、如何にして尺度概念を受容し、あるいは共有していったかを解明することが本研究の目標である。

3. 研究の方法

これまでの研究調査により、ベトナムの3つの博物館から阮朝期の、ものさし5本(フエ宮廷古物博物館:1本/ハノイ歴史博物館:3本/ホーチミン歴史博物館:1本)の実測および写真記録を行っており、また、阮朝期における主要な官撰文書である『大南寔録』(編年紀伝体実録)、『欽定大南會典事例』および『欽定大南會典事例続編』(政治制度に関する史書)、『大南一統志』(地誌)から、影印本で公刊されていない一部を除き、すでに尺度に関する法令や変遷について、読解・内容把握を終えている。しかし、本研究は、阮朝以前を含めたベトナムにおける全時代の尺度を対象としており、また東南アジア研究に対する新たなアプローチとしての「港市国家」論および海域アジア研究等の関連周辺研究の成果を援用するため、ものさしや史料を大幅に増やす必要がある。

漢喃文献の書誌学・文献学的研究として、カディエールとペリオ、ガスパルドンを嚆矢として、松本信広、山本達郎ら日本人研究者によって各所蔵機関の所蔵書目が整理されているが、第一次インドシナ戦争と、続くベトナム戦争の戦禍および混乱によって、失われたものも少なくないが、残った史料についても、ベトナム国内外のさまざまな機関に分散所蔵されている。その一つに、フランス・パリにあるフランス極東学院図書室があり、在仏越僑チュオン・ディン・ホエによる目録にて確認および検索が可能となっている。上記、影印公刊されていない官撰文書のうち、『大南寔録正編第六紀附編』および『大南寔録正編第七紀』について、申請者は実地にて閲覧、内容の確認を行っており、『大南會典事例続編後次』についても、リストにて所蔵を確認している。

以上の漢喃文献とその他関連研究資料について、ベトナム、フランス、日本国内の図書資料所蔵機関から入手して、研究目的で述べた総合的視野のもと、読解を進め、ベトナムの尺度について体系的な研究を行う。

4. 研究成果

初年度は、阮朝期における重要史料のうち唯一内容を確認できていない『大南會典事例続編後次』や、フランス植民統治下、インドシナ半島をはじめとした東南アジア全域で調査研究を行ったフランス極東学院の史資料群を所蔵する同学院図書室への調査を行った。また、同じく往時の写真資料など多くの史料を所蔵する、エクス=アン=プロヴァンスの海外公文書館での調査で、デジタル化されていないカード型の目録について、当該研究に係るものの撮影、デジタル化を行った。また、国内においては、本研究に関連すると考えられる、「港市国家」論および海域アジア研究等の周辺研究の把握および関連成果の収集・整理を行い、本研究の方向を確定させた。さらに、以上の結果を、国内外の研究協力者と情報共有・意見交換を行い、ベトナム人研究協力者には、関連史資料の所在についての事前調査を要請した。

次年度は、前年度行った、フランス植民統治下、インドシナ半島をはじめとした東南アジア全域で調査研究を行ったフランス極東学院の史資料群を所蔵する同学院図書室への調査によって得られた、阮朝期における重要史料のうち唯一内容を確認できていなかった『大南會典事例続編後次』の読解を行った。これにより、『大南會典事例続編後次』について、『大南會典事例』や『大南會典事例續編』との関連および編纂の経緯を明らかにし、さらに、ほかの欽定漢喃文献に無い、建築史的に重要な記述の存在を明らかにした。また、日本建築学会の[若手奨励]特別研究委員会「西洋文明圏外の古代・中世における建築書と建築理論の文献調査・研究」に委員として参画し共同研究を進めたなかで、なぜベトナムに、建築理論書あるいは建築技術書がないかということについての原因について考察したことにより、当該研究の意義を相対的に確認し、かつ研究の方向性についての意見交換が行えた。

最終年度は、初年度に行った調査において、フランス植民統治下、インドシナ半島をはじめとした東南アジア全域で調査研究を行ったフランス極東学院の史資料群を所蔵する同学院図書室への調査によって得られており、昨年度には、阮朝期における重要史料のうち唯一内容を確認できていなかった『大南會典事例続編後次』の読解が一定の成果をあげていたことを受けて、資料収集の優先度の高さから、再度フランスでの調査を行った。

その後、ベトナムを訪問し、ベトナム人研究協力者と直接、情報共有・意見交換を行ったが、新型コロナウイルス感染症の世界的な広がり時期に重なり、最終年度に予定していた、本研究の成果をとりまとめとなる、日本語・ベトナム語・英語を併記した小冊子の作成については、日本語のみの小冊子とした。今後、これについては、当初の予定通り、各国語併記のものとして、成果の積極的な公開を行い、関連研究分野から、成果の援用だけでなく、成果の還元を企図したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 木谷建太
2. 発表標題 阮朝漢喃史料における建築の記述 VI ピエール・パスキエと啓定蔵古院の設立について
3. 学会等名 日本建築学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木谷建太
2. 発表標題 『大南會典事例續編後次』の史料価値について ヴィエトナム・フエ阮朝王宮の復元的研究 その204
3. 学会等名 2018年度日本建築学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木谷建太
2. 発表標題 阮朝建築の営繕に関する官吏と工匠 ヴィエトナム・フエ阮朝王宮の復元的研究 その200
3. 学会等名 2017年度日本建築学会大会
4. 発表年 2017年～2018年

1. 発表者名 KITANI Kenta
2. 発表標題 The Architecture System of the Nguyen Dynasty, Vietnam, and Its Selective Acculturation to Foreign Cultures
3. 学会等名 EAAC 2017 (国際学会)
4. 発表年 2017年～2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----